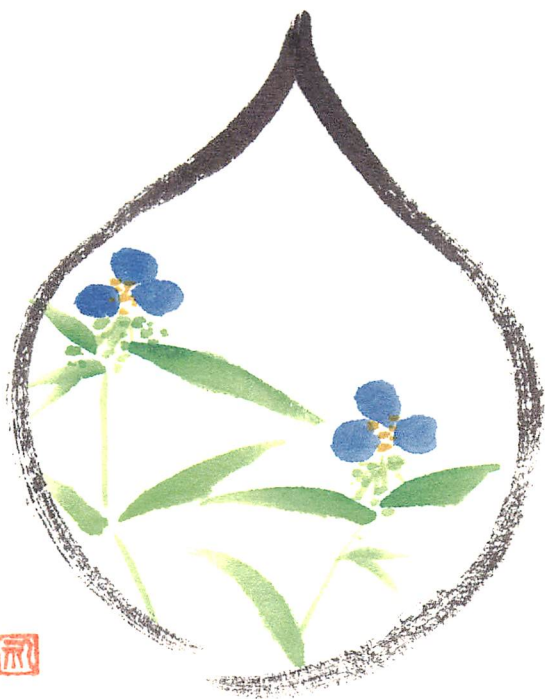


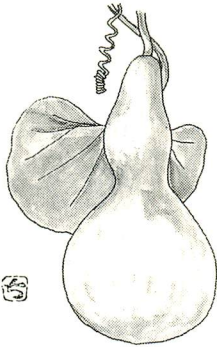
みめじみの

第10部



みめじみの

第10部



大谷光道著

目次

さあ、ご出発	2
溝さらえ	6
世直しはできるか?	10
皇太后様とお別れ	17
読者の頁	24
〈質疑応答〉	24
〈感想・意見〉	29
あとがき	31

さあ、ご出発

この間は先代せんによ闡如上人（平成五年四月十三日御遷化）のご命日を機に、第三世覚如上人の六百五十回忌と、元々当家のお内仏においでになった宗祖親鸞聖人ごしんえい御真影（木像）のお直りなお法要を勤めました。

新聞等でご承知のように、昨年十二月、多くのお宝が我が大谷家にお帰りになりました。お宝と言っても、教えの上で大切な本願寺歴代直筆のお軸などが中心で、いわゆる金銀財宝ではありません（笑）。今申しました当家の



さあ、ご出発



お内仏の親鸞聖人御真影

親鸞聖人御真影、今日いまから吉崎までお供する蓮如上人の御影ごえい（絵像）、そして先日ここに展示したのは蓮如上人関係のもですが、皆その一部です。

これは約十六年間、大谷派という宗教団体を相手に争っていた裁判が、昨年十月最高裁で確定したため、先代の後を私が引き継いでいたものです。

この蓮如上人の御影は、三百年以上もの間、毎年四月、福井県金津町吉崎での十日間の蓮如忌ぎよき（蓮如上人の御忌）の期間だけ、当家歴代が吉崎のお同行の方々にお預けしてきました。

御影の京都から吉崎までの往復をそれぞれ「御下向ごげこう」「御上洛ごじょうらく」といい、片道約二四〇キの道のりを一週間かけて徒歩で運び、往復で約一五〇箇所のお立ち寄りのお供をいたします。

このたび御影が無事に私のところへお戻りになり、お蔭で闡如上人にも申し訳が立ちました。

さあ、ご出発

ま、しかしながらこのようなことがなければ、今回のような形での御影の御下向ということもなかったでしょうし、また新しく多くの方々とご縁を結ばせていただくということもなかったでしょう。まことに不思議なご縁といただかれるところです。

以前私が申し上げたように、一箇所でもこのお形見の御影にお逢あいになりたいという方々があれば、御影を車にお乗せして私が運転して行ってでも、お逢あいいただけるようにしたいと思っていたとこ



ろ、四箇所ものお申し出をいただきました。中には金津の永宮寺のように十日間の御忌を勤めたいと申し出てくださるところもあり、まことにうれしい限りです。

このことによって、闍如上人のみならず、何百年も続けてこられたご歴代のご苦勞に少しでもおこたえできる思いがしているところです。何と云っても、このお形見の御影が「お出ましになる機会がなくなってしまう」ということが避けられた」のが何よりです。今日こうして皆様方と一緒に御影に手を合わせることで、それが一層実感されるところです。

溝さらえ

『お文』や『蓮如上人御一代記聞書』ききがきから、蓮如上人がいつも当時の人たちにご信心を勧め、またそのご信心のあり方について色々と細かく気をお配りになっていた様子が、ありありと伝わってきます。

例えば、「細々に信心の溝みぞをさらへて弥陀の法水を流せ」との『お文』の一節が思い起こされます。

溝の中に落ち葉や小枝やその他ごみがたまって水が流れなくなるのは、私たちが日常目にする光景です。私たちの煩惱をこの光景にたとえられて、煩惱のために阿弥陀様の光明がはつきりは見えなくなるので、溝をさらえてまたお念仏の光に当たらせていただくというわけです。

これは「お念仏を忘れるなよ」とおっしゃっているのと同じことなのです。が、いつもこのようにお言葉を変えながら、お念仏を勧めてくださいました。私の中学時代のことです。

あれは、掃除の時間だったでしょうか。どぶさらえをだれかがやり出したところ、面白そうなのでだんだん皆が集まってきて、その人数が増えてクラス全員がどぶさらえをするという、普通では考えられない奇妙なことが起こりました。ホームルームのときも、皆のやりたいことの第一位が「どぶさら

え」となったものでした。

この間も刈りましたが、私は庭や家の前の生垣を自分で刈ることにしています。不精者がしやものなのでこまめにはやりません。毎日そばを通りながら、枝が伸びてくれば伸びてくるほど、やらんといかんという思いと邪魔くさいなという思いが、同時に大きくなってきます。それでも、思い切つてやりだすと途中で止められず、きれいになっていくのが楽しくなつてきて、時の経つのを忘れてしまいます。



こしの
永宮寺でお腰伸ばし

そして、自分の体の外のことなのに、何か体の中がきれいになったような気がしてきます。

お念仏も同じことで、ご信心をいただいてその心持ちのすばらしさはわかっているはずなのに、いつのまにか遠ざかってしまっています。ふと思いついて「ナムアマミダブツ」をひとこと称えると、すがすがしい境地に瞬時に移動します。

信心の溝をさらえるといいますが、自分でさらえたつもりが、後になってそれは阿弥陀様のお力だったことにも気づきます。

蓮如上人の数々のお諭きとしがありますが、これから御下向にお供して、「そのひとつでも持って帰れたら……」と考えております。

さあそれでは、今からご出発です。

世直しはできるか？

今日ほどモラルや教育が崩壊しておる時代はないように思えてなりません。実子を殺して保険金を狙う母親と愛人、十年近くも少女を監禁した男、京都の小学生殺人、世の中は気の滅入るような陰惨な事件が、枚挙に暇ありません。

このような世相を浄土真宗の真実の教えを以って世直しはできないでしょうか。

最近ではモラルが崩壊しておる。浄土真宗の教えによって世直しが可能であるかどうかというご質問。

結論から申しまして、私は「可能である。」と存じます。

皆さん、河合隼雄さんと言えばおわかりでしょう。臨床心理学で我が国の第一人者です。最近よくテレビにお出になつていらっしゃる方なので、皆さんよくご存知じゃないかと思ひます。

総理大臣の諮問機関のまとめ役をされていて、二十一世紀の日本をどうするかとか、そういう夢作りにもお力を尽くしておられます。

昨年長女が結婚しまして、先方のお父さまと河合先生のお付き合いから、先生ご夫妻に仲人をお願いしたことで、ご縁をいただくことになりました。

先日大阪で「講演とフルート演奏の会」——フルートのほうはプロではありません——をされ、「日本のこれから」と題するお話の中で、総理大臣の諮問機関でこういうことをやっているということを述べられました。ほかの話は忘れてしまいましたが、一つ気になるお話がありました。

「色々と将来の日本を見渡していくについて、私たち日本人の考え方も、のやり方の背景、宗教的背景、それについてはまだ現在決めかねている。

日本人にはどういう背景があると決めていいのかまだちょっとわからない。」というお話です。

ここまで聞いたとき、私がこの話の行方について想像したのは、どれか特定の宗教に偏^{かたよ}った考え方ではないといけないという趣旨であろうということでした。

ところが実はそうではなく、話が外国に行きました。例えば欧米なんかは、ご承知のようにキリスト教の国ですね。

「外国の場合は常に神と私、神に対して恥ずかしいか、申し訳ないか、悪いことをしていないか、ということを考える。それに比べて日本人はどうかというところ——ここで私は、仏なり日本の神が出てくるのかなと思います、また偏ったとしても仏と言って欲しいと期待したりしていましたが、そうではなくて——日本人にはそれにあたるものがない。でも、あえて言うなら日本人のそれ（神）は『世間』である。」

世直しはできるか？

こうおつしやいました。

私ははじめは何のことかぴんとなかったのですが、まもなく、「まことに残念だけれどこれはあたつて、その通りやな。」と思うようになりました。

世間の目というものを、私たちは、というか日本人は——もちろん私も含めて——いつも気にして、笑われたらかなんとか、格好悪かったら恥ずかしいと、そんなことをいつも気にしている。

“私と私”という縦の関係ではな



くて、隣の人、近所の人、周囲の目、世間の目を気にして、「世間に恥ずかしくないように」と言い、「世間様」という言葉まであるくらいで、「世間」という「横」ばかりを見ている。前を見て歩かずに横ばかりを見て歩いている。横ばかり見て歩いていけば壁にあたる、電柱にあたる、当たり前ですよ。そういうことを私たちはやっているのではないかということが、そのお話以後ずっと頭にひっかかって、離れません。

横見て歩いていたら電柱にあたるというのは、たいへんわかりやすいたとえだと思いますが、もっと恐ろしいのもあります。戦闘機の編隊飛行ありませんね。V字形になって、五機とか七機ですか、編隊飛行。あれはまん前を見ずに、自分の斜め前の見るべきもう一つの飛行機をずっと見ている。その飛行機と自分の距離と角度を常に保ちながら、ピシッときれいに飛べるように練習するんだそうです。

私は乗ったことないからわかりませんが、それだけスピードが速いから、

前を見てたら横の飛行機との距離が縮まり過ぎたり離れすぎたりということがあって、前をほとんど見られない。そのために編隊飛行の事故というのは起こったときはまず全部落ちてしまう。つまり一番前で真中のリーダーの飛行機が操縦ミスをして墜落すると、全部が墜落するということです。こういうことを聞いたことがあります。

ここでたとえ話に使うのは、命がけで戦闘機に乗っている人にはまことに申し訳ないのですが、私たち日本人はそういうことをしてののではないかな、という気がいたします。そして、戦闘機と大きく違うのは、横を向いて歩いているのが命がけなんだということに気がついていないということですよ。

ですから、そういう横ばっかり見ている人、そのような中にいるということと自体、もう常に不安であります。本当に世の中がどこ向いて行くのかわからない。人のやることばっかりいっしょにやっているから本当に自分が何を

したらいいのかということを考える暇もないし、癖くせもついていない。

先ほどお示しのようないろんななんともいえない事件は、単純にこうだと言えるものではないにしても、前が見えなくなったために心の不安定、いらいら、そういう世の中の状態から起こるのではないかということは十分に考えられます。

そこで、私が申し上げたいのは、横は横で大事であるけれども、縦の関係ですね。われわれでいうならば、「阿弥陀様と私」。いつもお念仏を称えて阿弥陀様に見守られているならば、間違いを犯すことは絶対にありません。

このことをもう一度思い起こしていただきたい。私も含めてご一緒に「前を見る人」「縦ぶの関係を忘れない人」になっていただくことです。増ふやしていくことです。

このことが、ひいては世直しにつながるのではないか、かように存じます。

皇太后様とお別れ

去る六月十六日、「皇太后様ご崩御」という悲しみの報を聞きました。少し前の報道から、「あるいはご回復を願えるのでは」との期待も持っていたのですが、それも空しいことを実感させられました。

皇太后様といえば、何といっても「七字」を思い出します。

私が小学校一年生くらいだったので五十年近く前のことになります。両陛下が京都へおいでになるといっているので、大宮御所（京都）へ両親はじめ兄弟皆で伺った時のことです。

お待ちしていると皇后様（当時）

が入っておいでになり、話の内容は覚えていませんがいろいろなお話があつて二、三十分経ったところ、人の前で話すのが恥ずかしかつた私がつもじしだしました。

その様子を見て母が「なあに」と聞くのですが、それでもつもじもじしているの、「どうしたの」とまた聞かれ、皇后様も「どうなさつたの」とお聞きになりました。私は「あれや……あれ」と言うのみでした。困り果てた私は、テーブルの下



で指折り数えて「七字や」と言い出しました。

母も「七字ではわからないでしょ。なあに」と言うのですが、私はどうしても七字としか言わないものですから、それから皆をとうとう「七字」の当てっこにひっぱり込んでしまいました。

皆がいろいろ言うのですが字数が多すぎたり、七字であっても「正解」が出ません。

そして皇后様がついに、「テ・ン・ノ・ウ・ヘ・イ・カ、でしょ。」とお当てになって、「ちよつと」と仰って奥にお入りになったかと思うと、今度は天皇陛下とご一緒に戻ってこられました。

入ってこられた陛下は、「えー、えー、…」と仰るのですが、何のご挨拶もできません。頭の中が真っ白というのはこのことです。

私はお顔を見たいという気持ちから、両陛下がそろってお会いくださるものとばかり勝手に思い込んでいたために、皇后様だけだったのが不思議で

した。後になって思えば、「なぜ陛下はご一緒でないのですか」というつもりが「七字」という表現になっ
てしまっていたのです。「今、何々の御用をされてます」とかのお返事がある程度で、まさかすぐにお出ましになるなどとは思ってもみなかった
のでした。

ただでさえ恥ずかしいのに、そもそもお話ししたいことがあったわけでもお聞きしたいことがあったわけでもなく、兄弟たちは笑うし、頭の中
の真っ白はいつまでたっても取れ



ませんでした。

それに陛下は、皇后様と私たちとで気楽な時間をとると思ひ遣^やつておられたのかもしれない。特に用事もないのに引^ひ張^ひり出してしまつて、申し訳ないやら恥^はずかしいやら……。

しかし一方、堅^か苦^くしい環境で毎日お過^あごしの両陛下が少しはリラックスしてくださつたかなあと……。これはあくまで私の気休^{きやす}めです。

皇太后様とお会いするのは、母がお会いするときについて行^いつたり、父や兄弟も一緒だつたりでした。多分私が三十歳を過ぎたころだつたと思います。が、当時ステレオのアン^アンプを自作するのに凝^こつていたことから、「皇后様が音楽お好きだから一つ作^あつて差^さし上げればどうか」と両親が言い出^いしました。一ヶ月ほどかけて出来上^あがつた手作りのアン^アンプを東京まで私の車で運ぶことになり、名神・東名高速道路を走り、東京に滞^と在中の母と合流^あして御所

（皇居）の門をくぐりました。元々汚い車が高速道路を走ってさらにどろどろになったままでした。洗車してきたらよかったと思つたときは、もう皇居に入ってしまったいました。あたりは「黒塗りの車」ばかり。さすがに恥ずかしかつたのを思い出します。

手製のアンプということであつたそう喜んでお受け取りくださつて、使い方をご説明するのはすぐに済んだのですが、アンプの中身のご質問をされて、その次、その次とお聞きになり、驚きました。アンプのマニアぐらいしか興味を持たないことまで、にこにこ聞いてくださったものです。

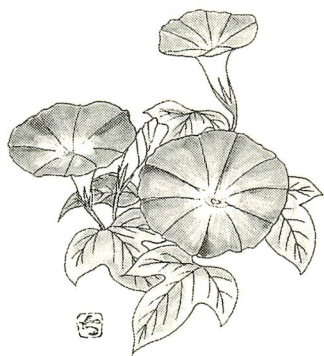
「聞き上手」とはこのことだと思ひました。「聞く者を飽きさせない話し手」というのはありますが、「話す者を飽きさせない聞き手」というのは、私が今までに出会つた中で、後にも先にも皇太后様お一人です。

「優しい方だつた」という言い方では尽くせない、キャパシティの大きな

お方だったと思います。先日、崩御のときに街角でのテレビのインタビュ
ーに、道行く人が「日本の母だった。」と言っていました。まさに名言だと
言えるでしょう。

神道のことはよくわかりません。私の慣れた言い方で、「これからも、お
浄土から見守っていてください……。」

合掌



質疑
応答

岐阜県大垣市 白井 秋子さん

質問一

とても判りやすく、私達の生活に忘れられている点がよくお話の中に語りかけられ感銘いたしました。

月日の流れは早いものです。

お彼岸もすぎ、やがてお盆がまいります。この地方ではお盆に「ほほづき」を佛前に又お墓にお供へしますが、漢字では「鬼灯」とかいて、ほほづきと読みます。意味を教えてください。辞書にも出ていません。

答

百科事典の「ほおずき」の項目に付記のような一節がありました。十

分ではないかもしれませんが、これで大体ご質問の要点は尽くされていると思います。

「精霊迎えなど、真宗的でない」と片付ける人もいるでしょう。しかし、ご先祖に対する思いが入口となつて、やがて他力念仏に昇華されていくのですから、こういった風習を頭から否定したり排斥したりするのは、よくないと思います。「私を他力念仏に導くご先祖」を否定するのは、将来の可能性を持った子供の能力を摘んでしまうのと同じですから……。

よくわかりのことと思いますが、繰り返し言います。「精霊迎え」はあくまで他力念仏への入口、キッカケ、方便であつて、決してそこに留とどまっているのではなく、私たちの終着点は他力念仏であるということをお忘れなくください。

また、このご質問のお蔭で小さいころ「夜に口笛を吹いてはいけない、蛇が出る。」といわれたのを思い出し、同時にその理由がここにあったことが解りました。

ホオズキは鬼灯とも書き、七夕や盆には庭先や仏壇に飾られ、盆の精霊迎えにホオズキちようちんを使用する。さらに魂たまホオズキがなまって丹波ホオズキと呼ばれたりすることなどから、ホオズキは精霊の依代たもとだったと考えられる。このため、ホオズキを屋敷に植えると病人や死人が出るというて忌む所が多い。また、夜ホオズキを鳴らすとへびや化物がくるといって嫌う。（『平凡社世界大百科事典』）

※よりしろ【依代・憑代】 〓神霊が招き寄せられて乗り移るもの。樹木・岩石・人形などの有体物で、これを神霊の代りとして祭る。かたしろ。よりまし。（『広辞苑』）

愛知浄土県常滑市 桑山 恒和さん

質問二

真宗にはお経に『般若心経』がないのはなぜですか？

答

いつもお話する「山登り」のたとえを思い出してください（『第五

部』、『第九部』参照）。

「浄土真宗」という登り道を示し、登り方を説いたお経は浄土三部経といって

次の三つです。

『仏説無量寿経』（または『大無量寿経』、略して『大経』）

『仏説観無量寿経』（または『観無量寿経』、略して『観経』）

『仏説阿弥陀経』（または『阿弥陀経』、略して『小経』）

浄土真宗の教えはこの三つのお経を根本として説かれています。それ以外のお経ももちろん大切なのですが、問題は私にとつて大切かどうかです。

教えとは自分が道を求める道しるべであり、例えば左の険しい道も右の緩やかな道も共に頂上に続いている場合、右が浄土真宗であるというようなものです。

別の言い方をすると、目的地に行くのに船で行く人は船の操縦や機械に対する説明書が大切だし、自動車で行く人は車の運転や構造に関する説明書が大切です。この説明書にあたるのがお経です。

浄土真宗では『般若心経』は読みません。しかし、間違っていると、排斥しているのではもちろんありません。

質問三

毎号拝読させていただいております。平易な言葉で日常生活の指針をお示し下さり、感銘を受けております。有り難うございます。

『第九部』の十三頁の最後の行に「生老病死」の四苦の「生」は生まれる苦しみと仰言っていますが、生まれる時に苦しいと思うでしょうか。これはむしろ「生きる」苦しみと表現する方が正しいのではないのでしょうか。お教え下さいましたら有り難いと存じます。

合掌

答

ご質問を見て、一瞬ひやつとしました。

私が間違っていたかと、慌あわてていくつかの仏教関係の辞書を引いてみました。大同小異はあるものの、やはり生しょうく苦は「生まれるときの苦」で、

託胎たくたいから出生までの苦しみ（『仏教語大辞典』）

母体に在る時より母体を出づる時に至るまでに受くる苦痛（『真宗辞典』）
などとなっています。

しかし、まことに然るべき疑問だと思えます。確かに仰るように「生まれる時に苦しいと思う」かどうかは難しい問題です。でも「生きる苦しみ」と言ってしまうと、老苦や病苦もその中に含まれてしまって、老苦や病苦が不要になります。物理的な痛さとか苦しきよりも、「この娑婆しゃば（この世）」という環境、境遇に直面し、それを背負っていかねばならぬ苦」と考えてはいかががでしょうか。生まれる、そのときは感じなくても、のちになって物心ついてから、自分が生まれてきたことについて考えたときに、「生まれてこなければよかった」「親が生んでくれなければよかった」と思いたくなるような苦、と考えるはいかががでしょうか。

感想 意見

静岡市 別符 和さん

『第九部』をいただきました。懐かしく、あたたかく読ませていただきました。

そして、光道さまのお人柄に心から感謝いたしております。

合掌

神戸市 中村 了りょうじん権さん

仏教の本流をよくご理解されその精神性を生活化されながら、楽しい生活を全うなさっているお姿と、その仏教的な生き方（生かされ方）を感知させていただくことができ、とても嬉しいご縁をいただきありがとうございます。

東京都 山崎 きみさん

人間は生老病死四苦八苦の苦しみ誰もが味わう定めですね。自分は浄土真宗のお陰様で御念仏は心の支え和やかになります。知人で無宗教と平然と、私は気の毒と思ひましたが、『第九部』の（我流教も自分の心との事。私は四苦八苦の苦しみをのがれるには欲をすてる事と反省、報恩感謝正しい人の道に添え御仏様の教えを信じ有り難く過ごさせて頂きたいと思ひ居ます。御念仏は心和やかになります。ご指導お願い申します。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

『第一部』を発売以来まる三年が経ち、今回ではや十部を数えることになりました。読者層もご門徒にとどまらぬ広がりを見せており、有り難くここに誌面を借りて深謝申し上げます。

『第十部』の区切りにあたって、『第一部』からをいま一度開いて見られてはいかがでしょうか。

著者・大谷光道台下は今号でもお話のように、御自ら吉崎への御影のお供ともや前号のごとく企業経営者への講演活動にと、精力的に外へと歩を進めておられます。お読みになっている方々が既にお気付きのように、浄土への航海のために、船の正しい位置を知り、目標を見極めて生き抜くよう、光の方向をお示し下さっています。

『みめぐみの』によって元気に生き抜く方々の輪がお一人でも多く広がっていくよう、あなたのすぐ身近な方々にも是非お薦めください。

みめぐみの 第10部

2000年7月5日 印刷
2000年7月10日 発行

定価 200円

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
-8167 本願寺寺務所内

TEL. 075(351)3555 FAX. 075(351)3120
振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社



みめぐみの刊行委員会刊